

草廡集卷冰解

雜下





草庵和歌集蒙求諺解卷第十四

梅月堂僧宣阿集編  
梅仙堂平景新訂正

羈旅ヒナツ

羈旅ヒナツ寓也。旅客カキタ舍也。左傳曰。羈旅ヒナツ之臣。注。謂旅客也。  
韓非和氏曰。羈旅僑士ヒナツ重幣在外。杜詩。况我飄然ヒナツ息  
定所終日戚々ヒナツ思羈旅。幽奇ヒナツ聞書ヒナツ羈旅ヒナツハ大ナル  
旅也。國をもめかくるをそむるはしとてし。旅ヒナツノ字  
むろりの時ハ遠近ヒナツを指す。東野ヒナツ柳抄物々出たり

冥路ヒナツ旅と

お板ヒナツに冥ヒナツ六ヒナツちりちりヒナツなるとさヒナツたけふとヒナツみくとヒナツかりヒナツたヒナツ  
たのらヒナツはをヒナツいヒナツるがヒナツじヒナツゆヒナツるみヒナツなきヒナツきヒナツるヒナツい也。色ヒナツ板ヒナツハたヒナツ  
近ヒナツとヒナツあヒナツるヒナツいヒナツ也。冥ヒナツをヒナツこヒナツゆヒナツまヒナツびヒナツちヒナツれヒナツくヒナツたヒナツのヒナツふヒナツらヒナツくとヒナツ海ヒナツ岸ヒナツにヒナツ

五十一



名所なりと云ふより引づりてはゆるるんあやむけのたつて  
かきこぶんじん 傍基に呼 例 希つそつたのちうとゆるるんあやむけのたつて  
乃沖くあやむ 二笑ふ千 雅上 引合をえんて

前太政大臣家へ 朝旅行

相坂れきのちこぬくぬふなり 船あつてはらりづり燈れ系  
お板をうえく 粟津舟のあをかり 明方よ。お板の雲ととき  
づり実をよゆるもの音も。次第ふとぬくたるの作。うんぬ  
しめりぬべさ。今活也よきく。百里のるど。六日七日のゆるる  
いふより。次第にをづりづりひかぬあやむけのたつて。昔より  
不自由たる也。殊く礼也たるぬや。船をば震と共なる  
か。秋風とて白川の雲かともなり。今十四五日のゆるる  
はく白川乃実かふる。半年とつて。やうとつてゆるるあやむけの  
ちね。昔のいやり。古歌とるる事。其四代の人よとて

たさくは感しすかま物也。よく心をけくはままこを

楊吟百首

りまたいやきさうか吉婦の屋戸さ人のまのさうくれは  
りやきづりいはいくをづり也。判べりやむをさうて  
石のいやきづり我身出り 後合不ぬ 古恋五 ぬれ方はいやきをさうわ  
うにづり 王う 毛 まは隨地 手入 ひよとていひて。流ぬのさうさ  
成也。伊勢物語よ。ゆるてさうの西うはのさうさうぬく有詩  
ふも。行々又行々たむあつ格也。あやのまをぬぬらう。ふは  
つとえゆるふとさうさうぬて。せらうぬぬら。あやのさうさ  
思ひやり。源氏流塵巻よ。引らうりぬぬら。いづり方のさ  
つて。わらうふて。ゆるふ三千里のぬ地 さんぜんり ぬら。ぬら  
空しゆりやう都のさうさ 侍候に後 堀川子法 關山万里遠。征人  
一望家山淚滿中 詩格上三 一為遷客去長沙。西望長安不



清子た大細云西季百首下

甲のりんしんとそくしきふせきんつをけらやみしるいぬさやれ申ふ  
のいなねをさやともるうがげにせくよこなりやせろさやろ申ふ  
おふさきやうも清の字也。社代もさけとらあろま同し。日夜  
申ふも里とらいて宿とのんと思ふも。寄ほくして。だがくが  
甲申ふ。さやうにせんふ也。そくしき。伴也

金蓮寺少く名所なりと傳へ時 富士山

まごれいはいはるにゆるるも。あはまきふより富士の根をそくし  
ねいのさふたう奉と云をそくし。一宿也。たかへば。東海まらに  
名ふられば。西てその心をん奉をそくし。日久。くあふ  
やうくそて。おれをそくし。さうい。及し。くあふ。まらに  
あふも。そくし。は。そく。まらに。さうい。きん。つ。え。し。き。ま。らに。

麓の田子浦まをりけりうさしむ。入ふれえられた程がさへなる  
うり。例。り。て。て。日。か。ら。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。  
あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。  
あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。  
あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。

降奥守頼氏家少く 旅行

大路とさへいをたうの程り 麓ふさそとりぬるすう  
て。豆。後。河。甲。斐。ま。の。り。う。さ。し。む。麓。と。通。り。う。り。は。も。日。較  
と。か。さ。ら。う。也。そ。れ。を。そ。く。し。ひ。末。奥。列。ま。た。の。ま。ら。に。  
事也。は。は。り。つ。て。と。や。ん。と。思。い。く。れ。し。く。都。良。香。富士山。記。  
云。觀。其。聖。基。所。盤。連。亘。數。千。里。間。行。旅。之。人。經。歷。數。日。乃  
過。其。下。去。之。顧。望。猶。在。山下。奉。朝。文。粹。十二。卷。の。末。景。濤  
詩。を。し。り。合。を。と。ん。と。ん。



大膳大進頼康家少将侍

羈中の馳望

朝みくまのやがたんと大それたるを小ゆるゆりぬる雪の

うのよひさかたう天のたかむらたんとて。あつも雪のゆたき

面白くし。朝のゆりもはなれずてえり石取の中も。第一

先此うの京をこそかゝる也。雪嶺界天白社三侍詩

浦妻

清らにが実うこそ旅人うらやまをこそかゝるね

清らに彼の雲もりとして信打さのるなぐね。信のうらやま

さとの難也。かくとさるる情もみかぬね。京の面白く

とらて御り也。園の人をさしむるむね。公とさしむる家乃

詞としてしり

等持院給た大臣家二首 旅行

ふれはらけはこれおらふこそをうべにうらやまうれはら

けりてとらうのまられはらうらやま。我んうらやまのうら

やときた。葛根の志あり。せむらうらやまをさるる。うら

乃若れ志げさるるをさるるゆ。目もさるる。さるるゆ

ゆをさるる。せむらうらやまをさるる。うらやま。さるる

うはらよはくし也

等持院二首記と家み十首

まねうらやまをさるる。うらやまのうらやま。うらやま

まねてさるる。うらやまのうらやま。うらやまのうらやま

うらやまをさるる。うらやまのうらやま。うらやまのうら

やまをさるる。うらやまのうらやま。うらやまのうらやま

うらやま

とくし







嶺西顧家郷 悉没烟樹之深 傳歌詞 詠地

善克寺よりつて作 四月九月十三夜ふれどとてをこ の月と  
ゆくとて

うらむとせむとてふをさかひまいたくもなせよる月か  
ゆくとてゆくとてふをさかひまいたくもなせよる月か  
がんとちたれまて月乃沈まら也。よの何いふとて月を待た也とを  
こゆとての詞をよけつるをの何い。松をすてふを待らんと十三夜ゆ  
月れをふいもなれ也。詞をすてふ乃月紙をての何い。松をすて  
ふとて月をさかひまいたくもなせよる月か  
とまきこゆと也

秋 旅 と

居れ家郷まの常ふ旅こそ思いつとて旅入るも  
雁のくる旅れ秋時どのもといつとてなせらるれ 後ふか 右下

奇ハ居のくる何い。旅れ秋時どのもといつとてなせらるれ 後ふか 右下  
は旅のくるも。居のおまをまけい。秋時どのもといつとてなせらるれ 後ふか 右下  
まに。旅れとゆらふい。とてのほさをなれぬ也。居れ秋時どのもといつとてなせらるれ 後ふか 右下  
方をやまるとつんと。力をほして也。とてなせらるれ。感時。花 賦 旅 後ふか 右下  
恨別鳥 杜詩 モロコシ

常 旅 秋 時 月 ぞ 旅 入 る  
居れ家郷まの常ふ旅こそ思いつとて旅入るも  
雁のくる旅れ秋時どのもといつとてなせらるれ 後ふか 右下  
まに。旅れとゆらふい。とてのほさをなれぬ也。居れ秋時どのもといつとてなせらるれ 後ふか 右下  
方をやまるとつんと。力をほして也。とてなせらるれ。感時。花 賦 旅 後ふか 右下  
恨別鳥 杜詩 モロコシ  
常 旅 秋 時 月 ぞ 旅 入 る  
居れ家郷まの常ふ旅こそ思いつとて旅入るも  
雁のくる旅れ秋時どのもといつとてなせらるれ 後ふか 右下  
まに。旅れとゆらふい。とてのほさをなれぬ也。居れ秋時どのもといつとてなせらるれ 後ふか 右下  
方をやまるとつんと。力をほして也。とてなせらるれ。感時。花 賦 旅 後ふか 右下  
恨別鳥 杜詩 モロコシ



武蔵の松は秋の白鳥 族名 松ノ葉内 奇形は松族

清子た大納言家十三首 月夜旅行

しるや月をのこりし分ゆくはゆきまらまらつら ゆき  
るをいそぐ。じきこの月とせりろるれ。宿りの月のあるを  
かまら。夜もまらまらけり也。びては萩の明ては月と松の影  
さ也。つらとて。び月ははわられし。あまのつらつら あまの  
かゆ也

九月にこそりれ日びし あまのつらつら

武蔵の松は秋の白鳥 武蔵の松は秋の白鳥  
武蔵の松をのこりし分ゆくはゆきまらまらつら ゆき  
るをいそぐ。じきこの月とせりろるれ。宿りの月のあるを  
かまら。夜もまらまらけり也。びては萩の明ては月と松の影  
さ也。つらとて。び月ははわられし。あまのつらつら あまの  
かゆ也

引くくくく。感慨深き也

拾遺詞を詠みく新よき也

武蔵の松は秋の白鳥 族名 松ノ葉内 奇形は松族

武蔵の松は秋の白鳥 武蔵の松は秋の白鳥  
武蔵の松をのこりし分ゆくはゆきまらまらつら ゆき  
るをいそぐ。じきこの月とせりろるれ。宿りの月のあるを  
かまら。夜もまらまらけり也。びては萩の明ては月と松の影  
さ也。つらとて。び月ははわられし。あまのつらつら あまの  
かゆ也

民部の家一日千首 詠

あまのつらつら あまのつらつら  
武蔵の松は秋の白鳥 武蔵の松は秋の白鳥  
武蔵の松をのこりし分ゆくはゆきまらまらつら ゆき  
るをいそぐ。じきこの月とせりろるれ。宿りの月のあるを  
かまら。夜もまらまらけり也。びては萩の明ては月と松の影  
さ也。つらとて。び月ははわられし。あまのつらつら あまの  
かゆ也



何邊。徒  
比と見ぬとてとよきも非。多かるくもさへも  
何邊。徒

り。何とてとよきも非。多かるくもさへも  
比と見ぬとてとよきも非。多かるくもさへも  
何邊。徒

名とてとよきも非。多かるくもさへも  
比と見ぬとてとよきも非。多かるくもさへも  
何邊。徒

鳥鳴山更幽 白霧山深鳥不聲  
音けりして後秋初 冬 鳥鳴山更幽王荆 公 白霧山深鳥不聲胡休 行

旅行

隔... 今へあつた方と云ふゆゑあり。けつりか  
白をわたりてぞわらん。けつりか方うをわらん。けつりか  
こころも煙きて中をぞ。秋のさういせり。雲横秦嶺家何  
在。雪投藍關馬不前。狄仁傑。行太行山及顧白雲  
孤飛曰吾親舍其下瞻恨久之乃去。唐書。思家步月庭  
中立。憶弟見雲白晝眠。杜子美。倦客登臨無限思。孤雲  
落日長安。東坡

秋を小秋さし月をあつた方と云ふゆゑあり。けつりか  
白をわたりてぞわらん。けつりか方うをわらん。けつりか  
こころも煙きて中をぞ。秋のさういせり。雲横秦嶺家何  
在。雪投藍關馬不前。狄仁傑。行太行山及顧白雲  
孤飛曰吾親舍其下瞻恨久之乃去。唐書。思家步月庭  
中立。憶弟見雲白晝眠。杜子美。倦客登臨無限思。孤雲  
落日長安。東坡



くして。故をさしやうのし事を。故よりわくをん。志つはどと  
く川より秀句よりく。くをらりあはばいを故つげんも白川の  
室はくえんと。拾法。引くをれやれく。くを月をん。故は誰か我  
をらうん。通法。月夜杜律。今夜鄜州月。闺中只獨看。遙憐  
小兒女。未解憶長安。香霧雲鬟濕。清輝玉臂寒。何時  
倚虛幌。雙淚痕乾。晚次鄂州。盧綸。萬里歸心對  
月明。三律

旅宿

相板の雲越しより空をうて柱のいあふくもよりをりる  
お板をこゆるとも。神く旅のそれの力をや神をより。毎夜  
旅宿してものねを呼ぶ也。ま。い。相板の雲とゆる  
く。よ。か。ま。れ。つ。ま。い。也  
頼康よまを約し三首の同んを

那のわとあつらひのふらびつぐどい日投りてあつらひん  
をんも。我がをさし。よりの日投をのきて。定めてこつらひつぐか  
とまりつとわつらんと。思ひやゆくとゆりくち也。題。郵壁間。郵  
壁山。醉醺。香夢怯。春寒。翠掩。重門。燕子。困。敲。断。玉。叙。紅  
燭。冷。計。程。應。説。到。常。山。詩。郵。客。館。と。あり。旅。宿。也。り。之。常。山  
の婦人をさやうして作る詩也。道の程をかきて。今。常。山。よ。り  
アつとけつひて。よつとあつらひと。婦人がをさしやう也。びやに  
うく似たり。詩格もやう。思。歸。白。氏。郵。驛。裏。達。冬。至。抱  
膝。燈。前。影。伴。身。想。得。家。中。夜。深。坐。還。應。説。着。遠。行。人  
次韻。王。雅。川。客。舍。山。谷。五。更。歸。夢。常。苦。短。一。寸。客。愁。無。奈  
多。慈。母。每。占。烏。鵲。喜。家。人。應。賦。廣。廈。歌。あ。の。母。や。妻。を  
あつらひ也。あつらひくはほもさへ。我旅のを。あつらひん

風日























退のの風を待てて志づの回乃結のうまねをくくた思の外  
風わきふ日較をて苦なるれ浪のあまこと毎日く回たうも也  
されわらう中ねるを風の退りたるれうまこくくわり

淵か井まゝと結れ奇を

移波深くやのう結れまやうと教をいつてまんのさううせ  
くやのふるは深湯のう石ををこめてまより判れたるかくれて後  
しけぬのくまもわくもた冬いまんたり拾をくやのうりう乃ま  
め也と教を何れぞとてんぐやとわんども。こは乃浦風吹く  
号をさるぬ也。いぞは何れぞしてのふ也。又植物よ委いりあ  
んていつくけり。と津浦難波の奇

氏戸御家ノ歌をさぐるて奇よまけん

結治の歌

苦のまふ家のぬとくつちかへ流にれは乃松とついであうさず

芦れらるを節と云ゆ人あうといひけり也。夜乃ぬを夕渡の泊り舟の  
一帯も明りあつ然いそあうまきとつら。げいんていんとう也。何れとて  
う也。蘭のあるうりまは雪清なふ里いぞま張志胡也とく拾をう  
をもまうく滝の水をいぞらうつひたろせれとげん法をまう拾を  
こうくまの志のなれ五月ぬいそあうまのふ匡房詞多 洲上盧夜

兩地御夢行旅白

鐘殿以高廣家了て 海路と

奥けり也吹まうせてり船の波れまかるとこまうりやんこら  
舟の退風はゆきそて物物されびらいつよよお上の不及おあてもみは漢へ  
しめてまうる事もせぬ物也。波りよらうくしゆ人上花下けしつら。ま  
つやいしうとゆりへまらうとてしん也。黃帽黄帽負負程程夜泊夜泊遲遲  
許格屋 詩格 一 かく似る詩あり

不都老寺ゆきまうりふたりは向んを



あつたに海は信路もさかぬあつたのせうけでさう  
あつたにさう後の方也。故の方也。さう方れはつ次第にさく  
海はさう海はさう。さうふえゆる内は残る中はなりがづかき  
く成てはさう海は残る也。さうもさうの面報つづる中  
ま也。さうの海は信路もさ

右大臣致して 海路

お田れさるのいづれをさすりてもさうな信路もさうなとさう  
片はさう然もさうなれどもさう方やさうさうとさうすもあつた  
さうさうさうさう大海のまはさうさうのさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

將軍家より 月茶格宿

波ちよりおさる月を船とめてさうの端みゆるあつたさう  
一二の向い茶方の事をさう也。今までの毎夜信のさうさう  
月かたは船とめてさう方角をさうなまればさうさうさう  
とれゆる方へ向いて月を待たさう也。この向よりさう茶の事也  
又説如此にてい前とさうさうさう月茶格宿也。類は月茶と  
あれども。今夜月をさう向ての事也。今お船とめて。波ちよりおさる  
月をさうさうさう。今までのいづれ信路よりおさる月をさうさう  
さうさう方角をさうなまればさうさうのさうさうさうさう  
月を待たさうさうさう。今夜もさうさうさうさうさうさう  
ひいて待たれども。さうさうのさうさうさうさうさうさう  
さうさうの勝もさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
待たれども。さうさうのさうさうさうさうさうさうさう

信路志略 十四 〇十六



金蓮寺二首 旅宿紙

久々これあまのやのりゆく一帯とすくやまよぬん  
再到楓橋張繼。白髮重來一夢中。青山不改舊時容。  
芙蓉驛。周子厚。俯仰十年如夢耳。舊題剝落已塵埃。  
下詩格 前年象深は結ねしうき事とぞん出をばそよまのこ  
と也。今夜又一夜うらと結とすうぬ。今宵も過去てなまね  
て思ひ出せば。是のやうにぞありて。旅宿あうし  
之妙を押しよ公うわら。又旅の情は懐舊乃公をうてれ  
り也。世の中のかくこそありきればはうらやあまのよわやと我  
宿ありて 後因格 拾旅 此詞のうらをうら也

哀傷奇

無常れんを

おもひのうらふ淵味とけりあれば結とすくも経とてをさる

世の中何れも常なるを川川の淵ぞくひりてんわらわ  
論語子罕篇曰。子在川上曰。逝者如斯夫。不舍晝夜。三  
解詩云。湘南即事。戴叔倫。沅湘日夜東流去。不為秋入  
住。少時此亦。古今れきけくより。けりあまの事なれくは  
を川り。今一限くらく無常の事をうら。其か。飛を川の淵  
淵とくうら。常なる事なれく。終いまごかふる同くわらわ水乃  
夜魚流とけり。あまの志がく出入息のまよゆ守。なが終て  
こまうぬとんよこれと事なれまうてかふる淵味より。はれ  
常たれまがはらうと事也。され川乃淵味とかりも。水の目  
断るく流るも。いづれと事。書ののけりハ眼。前よ終とありて  
んゆら事ならん。無常に終る。身乃終の。何の事。公はと  
ぬ事をもとぬ。いづれと事。とつて。深く戒めらる。是  
をうら。ぞかふる。ん。サの同。勢も。な。と。修。也。晝。夜。を。持。修。と























往生十方淨土遠證無上菩提果矣止觀一云如視世尊不嫌  
不患不見長短當割皮肉供養師况復餘耶承事師如  
僕奉大家矣大集經曰恭敬父母師長和上大得肉髻相  
矣

不の井のまはらとせはしそゆもさそてかこり女房中よP  
は

うけりゆくにりぬてあて井一ひきとまらぬりゆを志す人餘小  
とまらぬ教を死する人を月日たえて云るる教と云も同一  
之人の教を志するにゆく志すゆゆ月日たえてゆく志  
す也死しゆく日乃を志するにゆく志す也

由道一

うげとわまらぬいさそそいぬるゆ月日たてしんさふさ  
おまらぬつらうけとせはしよまきつらなるるるはかしの中

かくて月日たてしゆく事もたかく。最後不覺たう体也と云る。  
杜詩驚定始拭淚、ふりい受かしのをい種をさやく  
そい志づまらぬいさそそいぬるゆ月日たてしんさふさ

飛鳥井宰相 雅有の二十二年あはたさる。宰相曲侍

結派行方とてつらとて一次に 懐舊を

了のまはれ世小のこもむいかくづら志家と志するに志めいさ  
雅有ハ和歌の世にゆらゆら志すも志するに志すも志すも志すも  
むねの志すれぬ事い志すはより志すと志するに志すも志すも  
おのの志す乃と志すをい人の志すと志すも志すも志すも志すも  
志すと志すも志すの志すと志すも志すも志すも志すも志すも  
了宿植徳本衆人愛敬のふも志すも

後定多院崩御の後いづ秘たてて民ア歸りけり  
比僧心道我 一くをさるむくたふ了とていさけは志すも







吾れ朝よ けぢらなせしむるや 命書けけりか け  
そとひのあきんくも けり 返りよ

い新新千載集雑中へ 惟宗光吉部類云 續後拾遺  
風雅等作者 之傳 四位也 新河さくろ 事こそおつら  
をそくさつりれ也 定ちるまじく 我母の死しる事  
としちりずてや 命書のあるり けのほりもせも  
られさるんか けり也

このまじくも けりし けりし けりし けりし けりし  
けりし けりし けりし けりし けりし けりし  
けりし けりし けりし けりし けりし けりし  
けりし けりし けりし けりし けりし けりし

氏子歸りくも けりし けりし けりし けりし けりし  
けりし けりし けりし けりし けりし けりし  
けりし けりし けりし けりし けりし けりし  
けりし けりし けりし けりし けりし けりし

為定也 為定也 為定也

七条后うせ けりし けりし けりし けりし けりし  
けりし けりし けりし けりし けりし けりし  
けりし けりし けりし けりし けりし けりし  
けりし けりし けりし けりし けりし けりし

八月十五日うせ けりし けりし けりし けりし けりし

人の世れあがと 別をいり せんうと せんうと  
せんうと せんうと せんうと せんうと せんうと  
せんうと せんうと せんうと せんうと せんうと  
せんうと せんうと せんうと せんうと せんうと











るに依るといふも、と流りたり言ふあり、雪れきと  
宮よりわたり雪の晋祿康家、貧常、賦雪護書、雪は清命を  
まねるれども、まゝの景回のいふ言ふあり、流り雪へん、流と  
と、河の節、まゝと流りぬ、人れ命、いふ、わくまゝとて、流りぬ、まゝと  
と流りぬ也

極樂院は、（三ノ宮）、凌阿上人、うとれた、ふ、極樂をこて

極樂院、在、（三ノ宮）、掘井宮、庭中、又、空也、堂号、極樂院、四條坊  
門、南、堀川、東、陵阿、郡、類、云、新、後、古、人、今、作者

こゝに、いふ、神とて、わら、極、を、流、り、た、極、を、う、や、を、た、ま、ん  
極、を、た、ま、ん、を、い、ふ、神、の、わ、ら、い、か、の、と、人、流、り、極、と、い、ふ、と、こ  
極、い、ふ、か、ら、い、と、也、感、時、花、賦、流、社

み、ず、か、り、人、れ、七、年、ふ、わ、ら、て、八、月、の、こ、流

そ、わ、ら、い、ふ、あ、を、く、神、い、う、と、う、ね、よ、と、や、ち、と、也、乃、流、し、へ、と、う、り

七年に著。新しむ、わら、神、を、い、ふ、は、い、か、の、と、其、ま、ん、て、い、ふ、と、  
と、い、ふ、神、と、わ、ら、い、ぬ、い、ふ、は、七、年、の、流、を、て、と、う、い、ふ、事、の  
と、う、れ、と、平、月、の、と、い、ふ、事、と、也

入道大細云、十三年、清子、た、大、細、之、流、流、行、と、い、ふ、事、  
一、次、一、懐、回

入道大細言、い、ふ、世、に、也、元、德、之、年、八、月、廿、五、日、出、家、は、名、  
羽、釋、建、武、三、年、八、月、五、日、卒、清、子、た、大、細、之、い、ふ、定、心、  
也、乃、世、に、の、流、也

わ、ら、い、ふ、あ、を、く、神、を、い、ふ、は、い、か、の、と、其、ま、ん、て、い、ふ、と、  
乃、定、心、と、流、を、い、ふ、を、い、ふ、と、也、乃、世、に、の、流、を、と、い、ふ、也、  
信、乃、流、也、と、い、ふ、事、也、水、を、い、ふ、我、や、三、年、し、流、之、  
を、い、ふ、と、い、ふ、事、也、浦、子、を、い、ふ、法、を、い、ふ、と、い、ふ、事、也、  
ち、の、流、も、そ、の、り、一、次、一、懐、回、の、と、い、ふ、事、也、乃、世、に、の、流、也



兼てしるべきは、これに治の八丈に於ては、白宮より中君へは  
詔一書の返りと云ふれ、中君よりついでに詔一書也。推本

三河守高宗身すうりて後、を跡して人々を前より侍りて  
くハ、於てしるべきは、これに治の八丈に於ては、白宮より中君へは

今日昔よりかりぬ友のありまうて、然とよを思ふふつけても、さふ  
のいふとて、おのよがたふく。あふも也。世にあらはれ、まうりくばと思ふ  
人なきがゆへ、成りけるか。友系わね 拾哀

三寶院前大僧正賢俊追告れ、之明直言乃新法のまよ  
とくちけり。時 懐素

賢俊友系系圖云、賢俊、醍醐大僧正、東寺長者、日野俊之  
卿。男、資朝卿の弟。園太曆曰、延文二年、閏七月十六日、戊  
刻、賢俊僧正入滅。生年五十九

とくちけり。時 懐素

三寶院の礎石の小冊といふ、有。賢俊僧正のくちけり。清く、小  
冊の紙、あまのり、神が、あまのり、ハ、何とて、あまのり、は、あまのり、  
あまのり、と、は、涙、あまのり、を、あまのり、よ、せ、あまのり、あまのり、  
よ、は、也、脚、字、也

祝ア、行氏、二十年、あまのり、て、行親、宿、祓、佛、事、い、ゆ、も、し  
よ、き、て、捧、物、は、銀、紙、は、う、い、も、と、と、と、と、と、

行氏、部類云、祝部、行氏、祓、宜、行、言、男、新、後、撰、後、千、載  
作者、祝部、行親、日吉、祓、宜、行、氏、男、後、千、載、後、後、拾、遺  
作者、捧、物、は、追、告、る、向、物、也、持、物、ら、さ、げ、づ、り、侍、也

神は、あまのり、と、い、は、秋、の、あまのり、あまのり、あまのり、あまのり、  
秋、の、あまのり、劍、の、事、也、つら、い、下、傍、遠、あまのり、あまのり、あまのり、あまのり、  
忘、る、程、を、よ、う、と、云、候、又、あまのり、あまのり、あまのり、あまのり、  
あまのり、あまのり、あまのり、あまのり、あまのり、あまのり、あまのり、あまのり、











撰。玉葉。後千載。後拾遺。新千載。新拾遺作者。同一  
海。依の純まを記す也

よはすぐと海ふくも海月新よんの海を伝せしむる也

人のやれかゝるふもあつねも子ととるよまよひわらふ兼備拾遺

貞まの奇とてなすはよそに之海月もろくをばして親の身下と和拾遺

小。月をえて。長貞をさし出で。ハ月のくもろくをろくをいふま

よし終つたとて思ひ申す也

氏ア御勅撰をさすもさるるあづる。養院をさげごとて

少くも終つ小。延文元年七月。三十二年小あつりけり比し

新千載集れと。何とされけり。佛事れ次。人く奇とみ

ゆ。小。懐旧れ也

比アハハ。為。後也。後。天。皇。れ。清。河。後。拾。遺。集。勅。撰

の。事。さ。け。終。り。終。り。に。成。就。せ。ら。れ。た。正。中。二。年。卒。す

終。ハ。ハ。為。定。勅。を。さ。け。て。成。就。し。同。年。十。二。月。十。八。日。卒。後

終。ハ。ハ。為。定。勅。を。さ。け。て。成。就。し。同。年。十。二。月。十。八。日。卒。後

後。之。殿。院。の。延。文。四。年。四。月。十。八。日。卒。後。之。也。養。院。の。也。

撰。集。成。就。し。て。奏。回。し。て。天。子。に。獻。覽。せ。り。事。之。也。海。牙

の。事。也

の。事。也

そんろぎれしとやといふんてととられふうふわりのし信

かき新い。為。者。也。為。者。何。の。事。と。新。也。為。定。に。ま。し。力。を。撰

終。い。て。や。あ。つ。ん。今。年。遠。忌。乃。何。命。勅。撰。乃。事。と。為。定。之。乃

うけ終。り。乃。事。也。さ。る。と。さ。る。と。ハ。勅。撰。の。事。ハ。定。也。也。也。

撰。家。よ。う。け。と。ぬ。り。終。り。乃。事。也。乃。道。早。也。其。子。れ

為。定。若。く。し。人。終。り。拾。遺。集。と。末。家。の。為。者。也。う。け。と。ぬ。り

終。也。む。死。後。乃。為。定。撰。終。り。ハ。志。と。ぬ。り。先。ハ。為。者。う。け

を。ぬ。り。今。年。ハ。新。千。載。集。の。事。也。為。者。何。の。事。也。為。道。也。乃







やまらうの假躰也。根本の太日無始無終ありて一切の處よ。  
あまらふとけしん也。大れ字のな是也。やまらうの日の影のれい。物  
ふふあまのくてもくてもあつかりかるとも。摩訶毘盧遮那  
此云太日大日經疏曰梵音毘盧遮那者。是日別名。輔  
行曰毘盧遮那。此云徧一切處煩惱躰淨衆德悉  
備。身土相徧徧一切處。

釋迦

せふおとく月のこくおれ思ふかこまやげいのゆこれやふん  
月のみうか 例 海と衣のまもるとまづうて月のみうかほとさ  
やふととる 後成新拾尺 月はける月のみうかえうあいておの  
われはつらる白香 拾尺 長と衣はよとつりのせとて  
月のこくおれをみるうもか 待賢の院經川經十尺 端正皎潔猶如秋月  
とら佛の三十二相の面乃形をとける。面月長留十五天

存名詠誦 付法藏經曰面如淨滿月眼若青蓮華佛法大海  
水流入之難心讚教 龍樹菩薩十二礼文云面善圓淨如  
滿口の滅光猶如千日月 讚餘 善導六時礼讚同之月をいづく  
釈をよ喻つらる。佛月。娑婆世界といて。世間の愚暗を照し  
かすまふ。これすから。むく雪ふして。ほを修まきく。とら  
釈の事とらるちり

ゆりたた細玄家より百首歌よみゆり  
釈教中小 人衆

之ゆりいづちりいせれ海はゆりつらるのうけがてんを  
いせの海はゆりつらるのうけがてんをいせの海はゆりつらるのうけが  
往生要集第一云我等未嘗修道故徒歴無邊劫今  
若不勤修未來亦不可然如是無量生死之中得人身  
甚難縱得人身具諸根亦難縱具諸根遇佛教















けり本なる谷れ小妻と云はれり。のれりめくはう。つう戸の  
仙人よつう人さそ。お事をさる同よ。姑い小ねちりしう。本、つうま  
太本に成りり也。経文よ。ねり事いさけま。いづと事とこ  
らん。ゆりて。十年をさる。いん。とねと出。さる。ちり。  
の事。右。奇。に。何。く。有。事。に。

善量品

い。う。より。玉。れ。を。あ。く。と。け。し。は。い。の。世。の。契。り。あ。く。ん  
善量品。曰。尔。時。世。尊。知。諸。善。薩。三。請。不。止。而。告。之。言。汝  
等。諦。聽。如。來。祕。密。神。通。之。力。一。切。世。間。天。人。及。阿。修。羅。皆  
謂。今。釋。迦。牟。尼。佛。出。釋。氏。宮。去。伽。耶。城。不。遠。坐。於。道  
場。得。阿。耨。多。羅。三。藐。三。菩。提。然。善。男。子。我。實。成。佛  
已。來。無。量。無。邊。百。十。萬。億。那。由。他。劫。乃。至。自。從。是。來。我  
常。在。此。娑。婆。世。界。說。法。教。化。多。善。男。子。百。千。萬。億。那

由他劫を。い。び。世。界。よ。り。て。け。を。説。く。有。り。玉。の。を  
長。く。後。け。と。り。の。え。く。ま。回。乃。後。け。了。我。等。衆。生。も。せ  
世。く。衆。生。も。い。く。後。を。結。い。ん。と。り。玉。乃。を。ハ。善。命。乃。後。也  
い。か。い。ら。り。時。め。日。教。と。今。有。ん。を。お。く。や。ん

後成 詠藻

又。了。解。家。の。主。備。し。 教。王。よ  
山。王。備。と。し。す。い。て。の。事。れ。奇。也

と。あ。り。て。ま。ま。い。な。れ。り。あ。さ。い。い。や。あ。の。い。路。れ。契。り。め。と  
如。在。教。王。の。妻。人。を。淨。使。と。云。淨。慈。淨。眼。と。云。二。人。け。り。あり。  
け。二。子。云。雷。音。宿。王。と。云。佛。の。弟。子。と。あ。り。善。薩。の。行。を。そ  
え。り。又。母。二。人。を。す。と。て。云。雷。王。乃。説。け。し。後。入。善。提。樹。下。に  
あ。り。て。佛。道。の。行。事。を。お。お。す。け。し。い。と。あ。り。は。り。と  
云。は。姑。二。子。の。け。を。ま。て。け。よ。亦。又。母。を。同。道。し。本。れ。を。り  
さ。さ。い。し。ゆ。や。子。の。あ。り。と。後。入。り。け。と。ま。い。り。と。過。去。乃



あつたのちりゆん也

勧發品 植衆徳本

ふれふわさつりり花のまゝとぞくくんしけさひんさく  
普賢東方より来りて佛滅後也。此は華経をばつて得んこ  
といはれし佛もくく空しく。四法を成就した如く滅後本  
は華経をくくを。其四法の第二は植衆徳本といふは種よ  
わみみのつれたつたげ華経徳本より事也。今此はをくくは昔  
我々の徳本ありのこそくくゆん也と。あつたつた也。花乃色と  
いふゆんをわくといふ。徳本は事なり。弥勒第二十の種も植衆  
徳本は文あり

た各徳本 三条 曰古く細く色く一不異色

般若心経 色不異空。空不異色

やんけくみどりみどりくそくこれのさくくやうてしあつたつた

経云。色不異空。空不異色。即見空。空即見色。中の色  
あつたつたれは。なれては。このまゝ縁の空也。さうれば。色くく  
何れも色即是空。空即見色。空は色をくくは。さうて空や。さ  
くれば。空即見色。色は空をくくは。さうて空や。さ  
空見色といふは。空也。空は色をくくは。さうて空や。さ  
二諦の二而不二也。いふは。色は色なり。物と色と  
さくくやまれぬ。その縁なり。ん。色は。の縁は。公の年。さ  
さくくや。さくくは。けり。種。さ。花。秋。乃。ゆ。果。の。ら。り。み  
よき。い。や。さ。場。を。有。けり。後成。さくくは。色。即。是。空。空。即。是。色。の  
公あり

入道大細言十三回より。淨子。大細言。結縁淨の縁。さ  
ら種よ。公経。不増。不減

入道大細言のめ。無也。淨子。大細言のめ。定也。公経の。







佛性者即是如來法。法人の公けゆふし心所をいふは

はらひのちかんとらん兼備 まま

禽獸虫魚えんちゆうちゆうぎよまでもをてたぐ。皆ちんくを。佛性ありんか。

一切の事とらん。即佛性の理をいふ也。蓋し信使ひんをかり多一

何のふも佛性ありんか。故に。我んくしんくしんくしんく

つて。方は。一仏性のふらりありて。佛も。信使も。隨まひありんか。

かまのうら。信使も。信使のふらり。く。信使も。信使も。信使も。

見。一信使

二條大細言正和以ま自社して唯識論欽儀をてし

非實攝故如空花等

唯識論卷一曰。彼所執非實德等應非離識

別自性非實攝故如石女兒非有實等應非離

識有別自性非有攝故如空華等案とらん

取乃實攝の實字有字は作らん

はらひのちかんとらん。空より。空花のわらひ。空より。空花の

空より。非有攝故如空華等。勝論といつる。外道十句義を

立て。法法を攝し出因明。其中に。實徳業の三句は。法法の體相

用して。公外實有也。う。種とらん。わらひ。きしん。その。依。大なり性

とらん。其。大有り。實字の。法法とい。其。伴別ありとらん。是。故

く。伴。故。より。難。して。い。と。く。ぞ。う。ら。い。海。う。つ。と。らん。れ。實。字。の。法。法

は。心。識。と。離。して。別。乃。自。性。の。り。あり。と。らん。海。大。有。り。所。攝。は

非。と。らん。既。大。有。り。攝。は。あり。と。らん。空。花。等。れ。あり。實。有

小。あり。と。らん。と。らん。空。花。と。らん。目。の。あり。と。らん。何。れ。と。らん。れ。の。教

中。に。は。ら。ひ。と。物。が。ん。ゆ。り。也。と。れ。を。空。花。と。らん。實。有。り。の。あり。と。らん。

草菴草菴 卷一卷一 十五十五

草菴草菴 卷一卷一 十五十五

草菴草菴 卷一卷一 十五十五

草菴草菴 卷一卷一 十五十五



目がわきゆふふれしうる也。奇の公ハ。はらうとんは。始劫を以ていつり。じのまをらるる花とい。空花也。げ空華乃。あく實のたれ法は。はらいて。無始しうけう。法はを實かる。物とくわうしと也。ていまうい。げ外道のうら。一切の凡ま。は皆ふる也。ちん外道ハ。邪師邪教邪思惟のころに。ま。邪智とめて分別して。法は。公外。實あるとさう。餘乃。凡まハ。ちん。但俱生乃。は執りゆる。自然。法はと實ある。非んら也。げ俱生のは執ハ。大業と学する伴者ふと。だん常に。記り也。ま。無漏智とめて。辨せざるゆる也。分別乃。は執ハ。不記也。大業教を學して。法は。空乃。道理と知故也。非んら。法は。は公の。こはをいで。色は。二縁。心は。四縁。ふらして。生して。非有似有なる。物也。但空は。非性都。そのは。色ハ。因縁假有のけ也。げ因縁假有乃。色ハ。迷いて。實なる物とくわうしう。のわらうら。

あくたる實有の色をとい。物ハ。たれ也。是遍計所執性。非。多。非性都無かる。と。彼空花のま。

比叡山北中堂よりくわうしうるは。き。家。

ふ人のたのみ。あ。ひ。て。我。ら。を。は。れ。と。あ。る。れ。九院佛閣集云。昔傳教大師。延暦四乙巳年。生年十九歳。七月中旬。始從三津濱。大藏卿百杖之家。築。登。高。峰。獨。締。草。庵。松。柱。紫。扉。寬。窄。隨。本。意。也。大。師。發。大。願。曰。我。此。峰。立。大。伽。藍。遠。渡。大。唐。國。傳。佛。法。弘。圓。宗。教。迹。欲。護。佛。法。王。法。願。天。人。聖。衆。來。助。我。大。願。云。於。是。大。師。遊。行。此。地。不。思。尋。出。仙。人。經。行。之。地。峽。之。中。仙。人。數。十。人。面。々。誦。法。華。經。各。々。修。佛。道。致。隨。喜。意。行。仙。窟。邊。仙。人。向。聖。人。誰。人。此。崛。是。非。可。臨。凡。夫。處。何。以。未。斷。惑。力。來。此。崛。乎。大。師。答。曰。我。是。昔。靈。山。聽。

法苑珠林卷第...

...



衆大唐孝獻帝孫日本國近江國志賀郡三津濱住人  
大藏卿百枝一男沙門最澄也。有佛性弘通大願再為  
凡夫受生安婆世界為像法轉時衆生造藥師形像  
立大伽藍崇欲為其本尊尋佛料本今不得佛本  
云道人教曰我住處傍有倒靈木佛在世天竺道  
人赤梅檀之藥持未積木朽跡殖置長五丈餘也彼  
木為大風吹倒經千歲聖人早取彼木造佛像利益可  
新此處者五百賢聖修佛道場如來入滅後為荒廢地  
我等殘住修法奉經幸逢聖人以此地付屬弘通大  
士各可歸本土詔終暗迹隱去此即今明星尾也道人  
尋得佛木同七年憑三寶加被晝夜不斷起居三禮  
拜靈木奉造藥師釋迦多聞天像於絲色者義真座  
主大師入滅後因遺言手自身金色衣文絲色矣傳

教大師尊像造立時起居三禮念願唱曰南無淨瑠璃  
淨土十二最上大願教主藥師瑠璃光佛如予大願像  
法轉時衆生必可令安樂利益本像佛語顯曰聖人  
莫疑我大願於衆病悉除本願誓不改之像法轉時  
衆生必可令安樂利益云大師入大嶺杣取材本建  
大伽藍号一乘止觀院初下斧時具聲聞切利天故  
四衆八部前後左右圍遶天人聖衆來降放太光明  
助大師願下繩引地所造大伽藍大師義真座至手  
自刻藥師如來三尺尊像同十三年請興福寺尾張僧  
部賢璟演供養梵筵寄桓武天皇御願云案云々  
阿耨多羅三藐三菩提佛々我々杣々冥加  
わ々々々傳教大師此時の奇也作佛像功德の事法華經  
方便品云若人為佛故建立諸形像刻彫成衆相皆已

草菴卷解十五

十一







心性の淨土へ住すとす也。此は道理の西方淨土の如きは。十方淨土  
皆同意也。若し種も今人の西方淨土を教ふ故よ。若し極樂に  
土と稱しては也。若し此唯心已心をうくを得る人ハ。西方淨土  
は實に十方位新のありにあり。只は方すの胸の内とあり。隨  
其心淨即佛土淨されい。此心とて悟るとわれん。此處、即淨土  
なり。遠く西方と稱し。公外の住を求む也といふは。これの僻  
見也。心性の廣大無量にして。極に十方に徧し。以て三世を貫く  
ゆへ。十方の世一切の淨穢の法は。皆悉く各人現前の一念の  
心付く本末具足とす也。是故晉譯華嚴經には。隨隨淨  
淨。緣具造十は家といふ。法家の此土入聖の修行者と。さ  
らにを得るは。は。す。ら。と。ま。く。は。有。縁。乃。淨。土。と。住。生。す。也。  
是は維摩經に。隨其心淨即佛土淨と從。善導師ハ。若  
能依教修行者則門々見佛得生淨土といふり

門々見佛得生淨土

般舟讚云。若能依教修行者則門々見佛得生淨土  
は。お。こ。そ。法。の。入。る。は。は。の。ろ。り。み。あ。ま。の。門。ハ。わ。れ。も。

聖淨二門の教は異なるれども。依教修行をれば。皆淨土とすべし  
なり。此得生淨土ハ。廣く十方淨土に通じれども。今いま。西方  
淨土とて。せ。り。大。原。同。答。曰。十。方。淨。土。中。唯。有。住。生。法。と。曰。  
直。言。止。觀。妙。行。至。證。悟。時。者。必。得。淨。土。果。報。華。嚴。禪。門。悟  
入。遂。解。脫。日。者。自。然。可。至。は。王。家。即。此。意。也。

安樂集唯有淨土一門可通入路

此上、當今末法是五濁惡世の二向あり安樂集又云是以  
章提大士自為及之哀愍。末世五濁衆生輪迴多劫徒受痛  
燒放絲假遇苦緣。詔用出路豁然。大聖加慈勸歸極樂。若  
欲於斯進趣勝果難階。唯有淨土一門可以情怖入。



福へのるよりかへいまの世よまををいけりかやあつん  
今の世にまは万年五箇場乃何也般舟讚乃文に重浄二  
門の修行者遂に十方浄土みまするま成つる今人の列て  
浄土に就て西方極楽を預へままをよんり

普観のころり

觀無量壽經云見此事時當記自心生於西方極  
樂世界於蓮華中結跏趺坐作蓮華合想作蓮  
華開想蓮華開時有五百色光來照身身想眼  
目開想見佛菩薩滿虛空中水鳥樹林及與  
諸佛所出音聲皆演妙法與十二部經合出定  
之時憶持不失見此事已名見無量壽佛極樂  
世界是為普觀想名第十二觀無量壽佛化  
身無數與觀音大勢至常來至此行人之所

五經の身れまご清ねりりかんとそ花のうてあふすの辱りうれ  
此普観をこちを及心の常よまをたをりあつ也

儀揚神苑觀難成就

付生礼儀云問曰何故不令作觀直道專稱名  
字者有何意也答曰乃由衆生障重境細心麁  
識起神飛觀難成就也是以大聖悲憐直勸  
專稱名字正由稱名易故相續即生

と身をてよはは志起しあがりまう聖中れ志ありの心を  
いかにし中れ法ありまをれどおの心を志らんを古雅上  
多年観法をたして心をよはさんとしれも濁れの名を  
まは観法が成就かしてその濁れ乃をよてあり也是  
ゆへ念佛をすまうべきなり也世中清水の播列印  
南野のまわり







百千種樂同時俱作

いほぞきくね吹風のそとあそぶ木余よあそぶあそびあそび  
現うのまふまのね風がうらうらげれのをよりあそぶ初ん  
極楽乃うふ木もたの樂れあひのありてあそびてね風よこを  
のそふあわらふうそたててくもれ音楽乃あそぶ事をも今  
いほあそびあそびあそびあそびあそびあそびあそびあそび

寶池をよめる

阿彌陀經云。極樂園土有七寶池。八功德水充滿  
其中云云。稱讚經云。極樂世界淨佛土中處々  
皆有七妙寶池。觀無量壽經云。極樂園土有  
八池水。一池水七寶所成。乃至一水中。有六  
十億七寶蓮華。  
くしとらくたうれ池小くみれより面教よりういゆるか

うくみん。般舟讚曰。寶樹飛華。汎徳水。已為般舟。乘  
般直入蓮華會。化佛菩薩與衣被。寶池を觀するに  
善哉。淨土衆のうれ宝池の中は。般舟。乘。遊戯するを  
ありて。あそびあそびあそびあそびあそびあそびあそびあそび  
いほあそびあそびあそびあそびあそびあそびあそびあそび

十樂音中よ 身相神通樂

極楽よ往生するもの。身清淨よ老有りて五神通と  
得る事と後ふ文也。淨土に衆生六通を得る事  
佛の本願よ。いほ。五量。壽。經。上。卷。四。十八。の。中。に  
六通の教あり。六通。名義。俱。舍。論。廿七。卷。に。あ。り  
くしとらくたうれ池小くみれより面教よりういゆるか  
往生要集第一十樂の中は第三。身相神通樂者。彼土  
衆生其身真金色。内外俱清淨。常有光明。以此互











秋日適仁和寺源英時。荒籬見露秋。菊蕊深開。眞風  
老槐悲此詩。老槐出。しとあり。檜と槐と別るもの  
されども。うらの終始。うらうら。仁和寺古宮。とれは。引合  
きて吟と。一首の公。桂系。月の出。さし。事。うら。へ。た  
け。杉の洞。し。の。杉。乃。風。れ。出。ま。を。ま。け。の。公。し。と。か。と。を  
わ。ら。ふ。つ。と。と。云。て。懺。法。乃。殊。勝。か。ら。成。ち。て。し。あり

良惠上人 經堂 入滅。乃。後。四十九日。を。と。と。て。せ。り。つ  
け。り。

今。い。と。や。な。ら。う。ら。も。し。ら。ん。別。し。後。と。日。敷。へ。の。た  
親。後。よ。極。樂。よ。往。生。して。蓮。花。の。中。に。生。ず。ら。の。品。上。生。り  
已。下。花。開。は。遲。速。あり。或。い。暫。時。或。い。經。宿。或。い。一。日。一。夜。り。  
蓮。葉。あ。ら。け。て。伴。を。と。る。有。或。い。七。日。一。開。く。あり。下。品。上。生。の  
七。を。日。あ。り。て。開。く。也。今。と。と。よ。四。十。九。日。と。て。の。こ。も。れ。い。は。縁。し。

う。ら。た。ら。ん。し。げ。僧。の。あ。ら。何。の。あ。ら。も。と。わ。ね。も。四。十。九。日。と。て。の  
事。也。又。奇。に。も。日。敷。へ。ち。ま。び。と。わ。れ。ば。其。日。敷。の。縁。よ。七。日。の。あ。と  
し。ま。で。也。此。の。人。の。四。十。九。日。と。の。い。て。い。え。の。あ。ら。け。た。う。と。こ。こ。を。か  
す。し。ら。ん。と。り。の。あ。ら。も。と。わ。ね。も。と。わ。ね。も。と。わ。ね。も。と。わ。ね。も。と。わ。ね。も。  
縁。よ。ま。の。あ。ら。も。と。わ。ね。も。と。わ。ね。も。と。わ。ね。も。と。わ。ね。も。と。わ。ね。も。  
中。の。い。く。ん。と。わ。ね。も。

津土三部經にて。葬樂あり。供養あり。源中納言  
具行の。い。ま。ご。少。ね。と。り。は。し。ら。ん。後。王。を。は。り。れ。り。と。い。ふ。  
又。日。下。の。と。り。

以其種々香華妓樂及餘供具供養一切大威德天神  
地藏十輪經 具行師。部類云。從二位源具行。中將師。行男。  
後千載。新千載。新拾遺。新續古今作者

ふのくけり。い。れ。ん。と。被。あ。と。め。に。あ。ら。後。を。か。か。う。と。い。ふ。











七月二日。本宰府小尾遷也。同七年六月廿日。十六  
歳。小尾和列當麻乃禪林。入て難髪して。注如と  
づく。母ハ百能と云。小尾ハ成りし。廿年以迄。延曆元  
年。一死たり。源記乃後。母の修ふし。ていづる。ま  
す。これ。ぼ。尾。と。い。は。誤也。と。云。曼荼羅ハ大日  
徑義釋。三。具像真。云。曼荼羅義。毘盧遮那。本地常  
心。即是華藏。具躰。四佛。四菩薩。醍醐。果德。又云。曼  
荼羅。是輪圓之義。又云。曼荼羅。是。擯。搖。乳。酪。成  
蘇之義。曼荼羅。是。蘇。中。極。精。醇。者。浮。聚。在。上。之  
義。又云。曼荼羅者。名。為。聚。集。今。以。如。來。真。實。功  
德。集。在。一。處。乃。至。十。世。界。微。塵。數。差。別。智。印。輪。圓  
輻。湊。翼。輔。大。日。心。王。使。一。切。衆。生。普。門。進。趣。是。故。說  
為。曼。荼。羅。

ふと口これ西こそ秋とていふのよれすかおまろ後成り  
枝をさきまよのてれううふい西こそ秋のうらなれ  
織姫の西方は夏相とをり終ると。と。姫乃秋れ後と成り  
ててあり。西ハ秋乃方されたり

神祇

寄滝神祇を

は。本をさくく。秋のき。昔より。く。万代のうらなれ  
神代考云。發愠乃入干天。石窟。閉。磐。戸。而。幽。居。云。堀。天。  
香山之五百箇真坂樹而上。枝懸。八。坂。瓊。之。五。百。箇。御。統。  
中。枝。懸。八。咫。鏡。下。枝。懸。青。和。幣。白。和。幣。相。與。致。其。祈。禱。  
云。掛。と。滝。と。ひ。け。り。今。ま。た。幾。万。代。り。う。ら。な。れ。ま。り。ん  
也。鏡ハ。乾。乃。う。け。る。物。さ。れ。い。年。月。れ。う。ら。な。れ。ま。り。ん。と。せ。て。ま。り  
建武ハ。比。茅。持。院。傍。在。大。尾。有。り。考。は。此。神。祇。く。り。ま。り



をよまわれし

ねくこふたれちうゆりまをそがりのげらぶくべき若うまきとて  
男ふの八幡まは。係家の祀神たれいおされより。かげなぶくは。  
大長乃美名也。八中侍抄よか。そ氏ふ。まご大細言の何なり。む。  
それゆへ大長は必結ぶべき事を祀してあり。たのむと志  
らゆふみ足てあり。たのむと志ゆへ。せめてつら。若う若  
と。若う代のまごつ後也。又まはたのさうら何やちたん。  
後ふふしあり

神祇奇中

それうとつく代よりなりね神との禁よりうとつくとれうとつ  
そのかみんじうれ事と云。又いつとて。事のあり。その何をも  
つ。當時也。そのしう。神神のび神なり。たをこれ後より。  
つ。代より成わんと也。瑞籬ハ社の事也。瑞いなりてつ。知也。

神とは賀茂公の事也。此よりふんつらまわれ也。うらなつら  
り也

神祇と  
神祇と

長りふくまきけふれうらふすつらも若う万代のてふ  
春日ふ。藤原氏乃祀神されいあり。毎年二月の初申  
乃日まつ也。延喜式を第一神祇。四時祭。右政官内藏寮。近  
衛府。江家次第第三。公事根源等よ委。二月の初  
申されやまひふ岩とひまをいつたれまつら  
と兼を新ふとれまつら也

右大臣殿あま神祇

天の下若う若うい何をそとれして三笠の神はまつら  
若う若うい。右大臣殿の園白よりたり。天の若う改を



















ていつり

入るたき馬勢家と神社奉納きしめて奇り

いふへのおりろ水のたけりわさびけいひ向うやろりいふと  
能國朝きよ具して伊予國よはるりいふとるたに正月より三  
四月までいふもるりいふとるたに正月より三  
新しとさつたえんじおさつりまれば守。能國。奇りいふとる  
宮よまつてまて。あつていふとるたに正月より三  
能國は呼。天河苗代水よきたるたにせあつていふとるたに  
は神。神感ありて大雨降く。三日三夜やまんと。あつていふと  
りいふとるたに正月より三。能國の奇りいふとるたに正月より三  
われば今日のよ向り奇りいふとるたに正月より三。能國の奇りいふと  
りいふとるたに正月より三。能國の奇りいふとるたに正月より三。

寄道祝を

人どくみらをとるまぐ。玉は崎玉しうふるまをいふやまわん  
和奇の道とちたれんぐま。神意して。金玉のどくちう奇  
をいふとるたに正月より三。能國の奇りいふとるたに正月より三。  
りいふとるたに正月より三。能國の奇りいふとるたに正月より三。  
玉や石と細工とるまよいつて。能國の奇りいふとるたに正月より三。

有馬湯の社歌。杖といふを

能國の奇りいふとるたに正月より三。能國の奇りいふとるたに正月より三。  
杖といふを。能國の奇りいふとるたに正月より三。能國の奇りいふとるたに正月より三。  
杖といふを。能國の奇りいふとるたに正月より三。能國の奇りいふとるたに正月より三。  
杖といふを。能國の奇りいふとるたに正月より三。能國の奇りいふとるたに正月より三。

神籠籠















開封府歸德列城東南十一里亦孝王所置中有一白靈山  
山有落猿巖樓竜岫又有雁池内有鶴洲見諸史記  
梁孝王世家曰於是孝王築東苑方三百里正義曰括  
地志曰竹園在宋列宋城縣東南十里葛洪西京雜  
記曰梁孝王苑中有落猿巖栖竜岫雁池鶴洲見  
諸諸宮觀相連云俗人言梁孝王竹園也竹を友と云  
事當為友乃亦一有親王家としての奇事なり竹をよめる也  
契多春とわれいふて有んと云ふ孝王といへば顯の書れ字  
一をよるなり顯ハ竹契とて有りて花といふ

元亨二年三月中勢は親王花山屯中後を遣  
四人くまひて去りて侍時 寄花從  
以風をたさまざる代のやとよハ花のゆきとすハ開きと云  
以風をたさまひたる代よと云はれぬハ今りてハその家

後醍醐  
院玉女  
保元  
平治  
元年 吹風も地さすはる代のうらむきいれたる何ぞ先地をえたる  
とらるる代ははるのうらむきいれたる何ぞ先地をえたる  
種さするてのうらむきいれたる何ぞ先地をえたる  
れとゆて君がうらむきいれたる何ぞ先地をえたる  
くらむらむてそのうらむきいれたる何ぞ先地をえたる

和歌所三首 寄道從

吹風も地さすはる代のうらむきいれたる何ぞ先地をえたる  
君のうらむきいれたる何ぞ先地をえたる  
さするてハ和歌もよ代の風を歸家と也  
續子載集奏覽れぬ和歌所ありて人くさす  
く時 和歌もよを  
續子載集奏覽れぬ和歌所あり



交情のちと強き。君が代よつとてさあせれねどぬら  
敷嶋の日本ヤマトれ名。やまの及の所也。身みはくはとさよ同。若  
代り新奇のたれ絶るをつとて再興さいきやうせしむるひる  
ひりねの残る也。中庸云。絶ツツ絶タタ興オコ廢スのつねあり  
寺持院勝た大臣家。月次新會りからさし一昨  
を上鶴と云事を傳き終一よ

和々の浦のわづれとらひて子せらかひしてとまん宿たの池あり  
和々の浦よ坊みらふれいがた深をわみきべをけりてかかぬ海  
赤人後和奇れつ古難中のふぐとを乃池ありふひも通ひて住ま  
と。祝の心をよみて和奇なる貴ふひり繁昌はんじやうとくま事をよ  
つとすまんととえんとさづの住。水乃池みづいとさうけつり

梶井は親王家ゆく 露

まののふさしむしはあなる交情の契りいふ世も絶りてさし

なつらひ親王とけちあり。當座の奇人遊をこめて祝する心を  
よみて。千年も絶りて人合ひとがひとさうと也

和秋の命あり 鶴賀遊年

り東も程ぞとらふけと和れさふ代をを結し露の毛衣  
和々の浦よ。赤代もまねありさる懸されいふれまもよりのい  
ふら久めつとよみて。和奇の末久く業わざへと業と祝せ  
つ。衣をかゝるつとよよせて赤代もいふらとさうり  
三寶院僧正房の和登はくつてさう入れしとて祝の  
ころり

泉屋夏部と水部と育に居

きれ入てあををいふさしせけり常といさう一松のいた水  
樹中細く教たふ。西坂本の滝の雲よかき付くは伊勢いせ音  
羽川をたいて流と滝は流よ人れ心のんえま下とられ











委法... 委法のやまし。心無著。よんかきり。奇の心。和奇の教者より。何千  
何方。いふまゝあり。とれすなり。若くは千歳といふ。ぎんろくあり  
ゆ。まごの教して。たぐさく也。引割の尾。うらふの。老根をよめて。為  
ふ。たれ。白玉。子世の。教も。 引割の尾。うらふの。老根をよめて。為  
古交

寄神祇祝

やをよらげらぬ。い。と。見れ。ど。い。ふ。ま。も。も。ろ。ろ。ふ。世。は。い。が。ま。れ。ら。あ  
やをよらつ。ハ。八。百。万。也。日本の神乃教を。之。り。國津。み。ろ。は。  
天神の地神の。 天神。地神。ハ。海。の。國。は。み。ろ。も。も。わ。は。あ。り。又。別  
乃。け。を。ま。し。く。れ。奉。地。神。を。つ。ら。天。神。ハ。其。四。一。こ。り。の  
ち。り。教。の。神。乃。ら。い。い。ま。若。か。代。を。ふ。也。万。代。と。年。の。終。也。

近衛殿御書

竊視此集之緝編可謂和歌之規範。頭意  
於萬象之中。垂風。舞於千載之後。誠見此  
道之遺。美也。豈不斯文在茲乎。不足嗟嘆  
斯吟性情。而三

竊 小補韻會云。廣韻。又決也。字彙云。私也。西都賦。序。臣竊

見海内清平。朝廷無事。按。と。ら。ん。早。下。して。云。詞。入。類。也。

緝 韻會云。績也。增韻。又績也。字彙。績。實也。

編 韻會。次。簡。又。列。也。

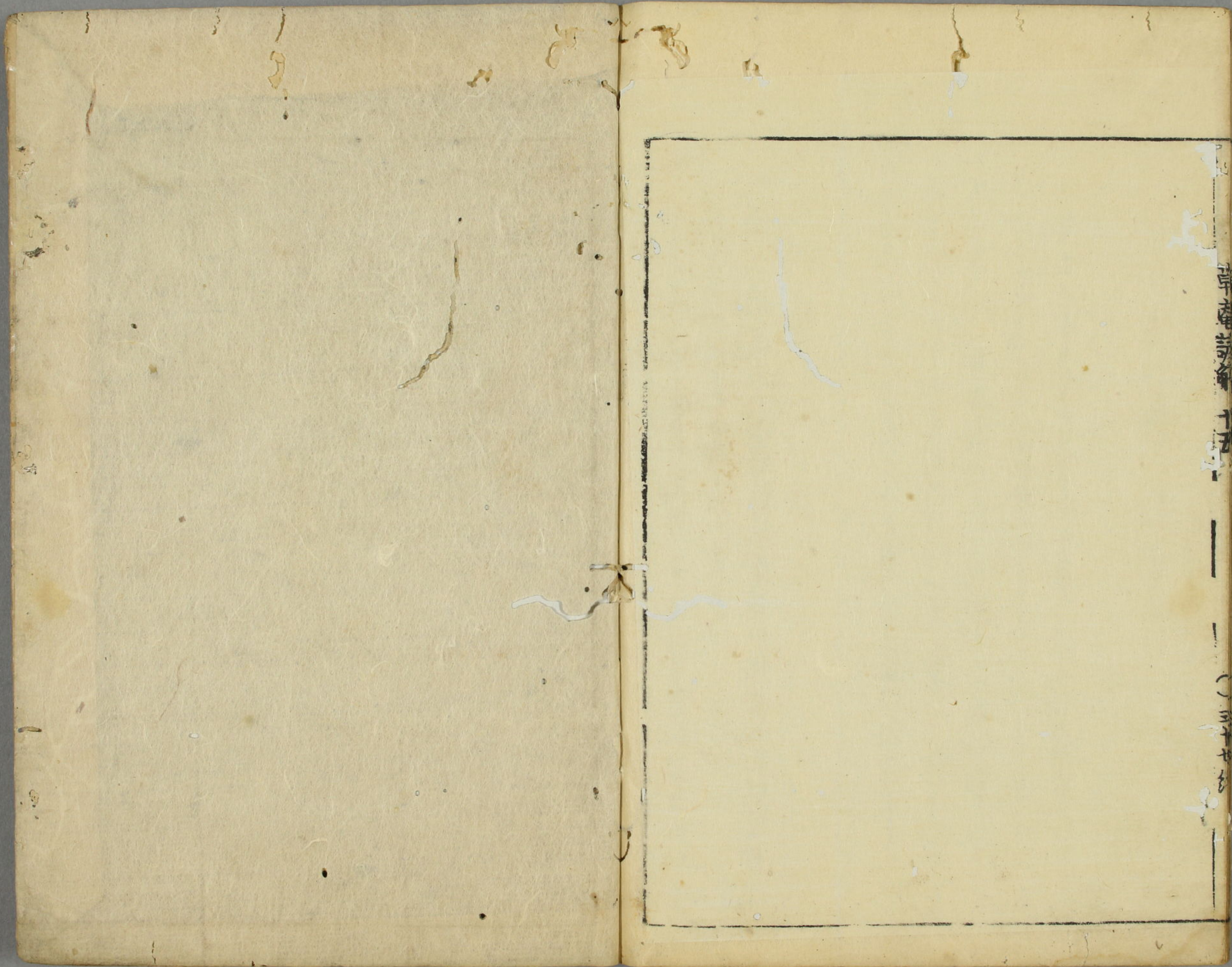
規 韻會云。說文。有。法。度。也。

範 字彙云。法也。式也。









新編... 十四

( ) 南... 中...



